

お湯を沸かす

柴 田 武*
(Takesi Sibata)

1. 「お湯を沸かす」の非合理

お湯を沸かすことなど調理のなかには入らないだろうし、調理科学の対象にもなるまい。しかし、ことばの文法として見ると、実に妙なロジックでできている文であることを知る。へ理屈をこねる年ごろの子供から「“お湯を沸かす”なんて変じゃない？ “水を沸かす”と言うべきよ。」と言われたことがある。彼らも納得のいく説明を待っているように思われる。

英語でも boil water だから、確かに「水を沸かす」のである。なのに、どうして「お湯を沸かす」と言って、「水を沸かす」とは言わないんだろう。それを、ことばの学問では必ずしも納得のいくようには説明していない。ある人は、この1例をもって、だから日本語は非合理的な言語だとか、逆に、実に無駄のない表現で、これこそ日本語のすばらしさだとかいって、日本語論へ持っていく向きもある。

実は、そんな大騒ぎするようなことではない。日本語としてひどく特殊な言い方というわけではない。しかも、この種の文の成立をかなりはっきりと説明することができる。

その説明を始める前に、「お湯を沸かす」は、文として意味のあいまいな表現であることを指摘しておきたい。「お湯」は、飲みものとしてのお湯のこともあり、入浴するお風呂のことでもある。二つのことはまったく異なることと考えてもよさそうなのに、それを区別しようという構造内の力は働いていない。あいまいだけれども、これで少しも困っていない。ただし、入浴の場合は、ほかの言い方があって、「お風呂を立てる」ともいう。

さて、ここでは、飲むお湯のこと。そのお湯について、

1. お湯をこぼす。

のように、お湯という対象に直接働きかける場合に類推して考えると、

2. お湯を沸かす。

は、すでに沸点に達したものをさらに熱を加えて煮え立たせるという奇妙なことになる。しかし、2.は、煮え湯を沸かすことではない。やはり、へ理屈屋の子供の言うように、水を100度になるまで熱すること、つまり、「水を沸かす」ことなのである。こう考えると、2.の文は次のようにパラフレーズできる。

3. *お湯に水を沸かす。

実際には、この形のままでは使われないけれども、ロジックからすると、3.のようになる。

ここで、「お湯に」とは、「お湯になるまで」「お湯の段階にまで」の意味である。3.の「に」は、

4. 夜が明けて朝になる。

5. もう8時だから朝食にしよう。

の「に」と同じである。経過があって、その到達点を、あるいは、その結果を「に」で示すのである。

そこで、「沸かす」の意味を「水を沸点にまで熱する」と考えよう。ここには、「水を」という要素が入っている。だから、これを3.の文に代入すると、

6. *お湯に水を1水を2沸点にまで熱する。

となって、「水を」が重複する。そこで、「水を1」を除去すると、

7. *お湯に沸かす。

となる。7.が日本語として変なのは、「沸かす」の意味の要素として入っている「に(まで)」が「お湯に」の「に」と重複するからである。そこで、「に」を除去して「水を2」の「を」を残したと考えるのである。つまり、3.の文に除去する部分をくくって示すと、

8. *お湯(に水)を沸かす。

となる。これが「お湯を沸かす」の成立過程だというのである。

わかりきった、なんでもないことをこむずかしくするのが言語学だという批判はある。ある程度認めざるをえない。科学や学問には多少そういうことがあるからであ

* 東京大学名誉教授

る。ただ、わたしたちは、研究対象のことばについて、その構造も歴史も知りたい、人を納得させる説明をしたいというのである。

「おにぎりを握る」などの類例

さて、「お湯を沸かす」は例外的な言い方だろうか。いや、類例はいくつも見つかる。いま、調理に係わることから同類の文を思いつくままにあげると、

9. お茶を沸かす。
10. お茶を入れる。
11. おにぎりを握る。
12. てんぷらを揚げる。
13. 漬け物を漬ける。
14. 御飯を炊く。
15. パンを焼く。

のようなものがある。どれも「お湯を沸かす」と同様にして説明できる。

まず、9. は

16. *お茶〈飲みもの〉に水を沸かす。

から成立した文である。ここの「お茶」は、すぐ飲めるようになった、飲み物としての「お茶」をさしている。野暮な男仲間の作業場などで、はじめから葉茶に水を加えて沸き立たせたりする。これでは、お茶のかおりも何も出ない。これも「お茶を沸かす」に違いないが、ここでとりあげるのは、もっとまじな、普通のお茶の準備法である。

次の10は、

17. お茶〈葉茶〉に熱湯を入れる。

から成立した文である。ここで、「お茶」は茶の葉である。なお、「熱湯」は、番茶や焙じ茶の場合で、煎茶は沸かした湯のさめたものでなくてはならない。それは、お茶の立て方のコツではあるが、現実、煎茶に熱湯を入れる人もいる。

「お茶」について

ここで、お茶というわけでもないが、ちょっとわき道にそれることを許していただきたい。それは、「茶」「お茶」について、上の例文に括弧をつけて注記したように、茶畑から座敷の机までいろいろの段階がある。それをしばしば区別しないので、ここで分析しておこう。

「お茶を摘む」の「お茶」は、茶の木^いの若い芽のこと。それを蒸して、冷却し、さらに焙^いった「葉茶」があり、葉茶を煎じて飲めるようにした「お茶」もある。なお、葉茶を粉にしたのが抹茶（粉末の茶の意）で、これを飲めるようにすることは「お茶を立てる」である。だから、「お茶を入れる」と言えるのは、抹茶以外の場合である。実際の製造過程には、各段階に専門的な名称が与えられ

ていると思うが、日常のことばでは区別せず、すべて「茶」「お茶」で通る。

さらに、茶をめぐって、もう少しわき道に入らざることを許していただきたい。「茶色」というが、この「茶」は、上の製造過程のどの段階のお茶であろうか。不思議なのは、どの辞書を見ても、「茶色」は「茶の色」という語釈しかついていないこと。どの段階の「茶」なのか、辞書に頼ることはできない。

わたしたち都市生活者にとって、一番親しい「お茶」は、飲みもののお茶である。茶色の茶は、飲みもののお茶かと思いたくなるが、どうもそうではないらしい。湯のみにつがれたお茶をじっと見つめても、それはむしろ緑色であって、茶色に傾いた黒ずんだ色ではない。ただし、出がらしになると黒ずんでくる。これから考えて、茶色は、葉茶を蒸して染めた色ではないかと考えている。

「おにぎりを握る」など

もとへもどして、11. について。「おにぎり」がすでに握られていて、すぐ食べられる食品になっていれば、いや、実際にそれ以外のものではない、それをさらに握るとは妙なことになる。これは、

18. *おにぎり（に御飯）を握る

のようなしくみの文であると説明できる。

次の12. についても、

19. *てんぷら（に魚）を揚げる。

のような文から出てきたものである。この際、「を」の前に来るのは「魚」とは限らない。てんぷら屋で食べるてんぷらは「いろんなもの」であるし、わが家では何か一色である。

続いて、13. の場合も、「を」の前には、「漬け物」でも「奈良漬」でも「べったら漬」でも、漬け物として出来上がったものを表わすことばならば、どんなことばでも入れることができる。

次の14. も、このままだと、炊けた御飯をもう一度炊き直すことかと思わせるが、実は、

20. *御飯に米を炊く。

からの生成である。

次の15. は、パンをトースターにでも入れて焼くことではなく、小麦粉を醗酵させて、それを焼いてパンを作ることである。なお、英語でも「パンを焼く」は bake bread というから。この点では日本語に通ずる。単に通ずるということだけではなく、英語にも「お湯を沸かす」式の表現があるという事実に注目しておきたい。

以上、9～15の文を次の21～26の文と比較してほしい。

21. お茶を缶から出す。

お湯を沸かす

22. おにぎりを包む。
23. てんぷらを紙の上に載せる。
24. 漬け物を出して皿につける。
25. 御飯を食べる。
26. パンをちぎる。

9～15の文の動詞と21～26の文の動詞を比較してみると、前者は、動作の継続を表わす動詞（継続動詞）、後者は動作の瞬間を表わす（瞬間動詞）であることがわかる。

動詞を分類すれば、もっぱら継続を表わす①「継続動詞」ともっぱら瞬間を表わす②「瞬間動詞」と両者を表わす③「継続、瞬間動詞」の3種ある。9～15と21～26の動詞を分類すれば、

- ① 沸かす、揚げる、漬ける、炊く、焼く
- ② 出す、載せる、つける、ちぎる
- ③ 入れる、握る、包む、食べる

ここでは、③の継続・瞬間動詞を検討しておこう。

「入れる」については、10. の継続表現に対して、

27. 投入口に百円硬貨を3枚入れる。

は、瞬間動詞の場合である。

11. の継続表現の「握る」は、

28. しっかり相手の手を握る。

は、「瞬間動詞」の場合である。

「包む」について、22. は瞬間を表わすが、

29. テープでとめたり、糸をかけたり、二重、三重に包む。

は、「継続動詞」としての用法である。

「食べる」について、25. は瞬間的表現であるが、

30. 時間をかけて、ゆっくり食べる。

は、継続の表現である。

2. および9.～15. の文は、すべて継続動詞で、「を」を介してその前には、継続動作によって得た成果を表わすことばが来ている。こういう条件がととのえば、「お湯を沸かす」式の文が可能だというわけである。

なお、上の例文は、あえて調理につながる内容の文に限定したが、もちろんそれ以外の文にも認められる。

31. 壁を塗る。←壁に塗料を塗る。

32. 爪を塗る。←爪にマニキュアを塗る。

「お湯」「お茶」「おにぎり」の「お」

以上、「お湯を沸かす」と同じ構造の文に出て来る行為の結果を表わすことばのうちに、「お湯」「お茶」「おにぎり」と、3語も「お」のついたものが出てくる。「お」は接頭語だから取りはずしが自由なはずであるが、「お」をはずして、

33. ?湯を沸かす。

34. ×茶を入れる。

35. ×にぎりを握る。

とすると、33. は、このように言わなくもないが、やや不自然である。34.、35. については、東京方言話者にとっては、まず言えない言い方である。ただし、35. は、お鮎のことなら言える。

一方、「お」という接頭語はどんなことばにもつけられるようにも見えるが、「お湯」「お茶」「おにぎり」以外の3語について「お」をつけてみると、

36. ×おてんぷらを揚げる。

37. お漬け物を漬ける。

38. ×おパンを焼く。

まず、36. と38. はまったく不自然である。36. は、語が長いからであり、38. は外来語だからである。ただし、37. は、こう言えなくもない。

だから、「お」も、つくことのできることは、あるいは、つけやすいことばと、そうでないことばとがある。「お」は丁寧さを表わす敬語の接頭語ではあるが、丁寧に言おうと思っても、必ずしも「お」をつけられるわけではない。

33. のような文では「お湯」としか言えない。34. のような文では「お茶」としか言えない。35. のような文では、「おにぎり」としか言えない。このことを考えると、これらの「お」は、現在では「丁寧な表現」ではない、もちろん、成立について言えば、調理場の女王である女性のことばの、丁寧に言おう、あるいは、ことばを美化して言おうとする欲求が生み出したものである。それが今では男性のことばにもなったということである。

この3語が「お」と堅く結ばれて、もう離せなくなっているのは、「湯」「茶」については、「てんぷら」や「パン（焼かれるパン）」よりもいっそう日常的なものであることも1つの理由である。さらに、この2語が、いずれも、ユ、チャという1音節の短かい語だということもある。

日本語に限らないが、長い語は省略などによって短くなる一方で、あまり短かくなるとそれを補強する目的で長くするということが行われる。

「葉」には「葉っぱ」という補強形がある。「歯」と同音衝突を避ける効果もある。「値」は、「値がいい」「値が張る」のような語句では使われるが、「～を聞く」「～がわからない」のときは、「値段」という補強形のほうがよく使われる。さらに、「～割れ」「～が高くつく」は、別語の「コスト」を使って「値」を補強する。いま、アイウエオカキクケコと五十音図を追って、1つずつ、それだけでできていることばを思い出し、さらに、その補強形、補強語があるかどうか試してみたい。最初

に出てくるのが「胃」であろうが、これには「おなか」という補強語があるといった調子である。

「湯」を「お湯」というのも一種の補強語である。「湯」には別の補強も施され、「さ湯」という補強形もある。「湯」と「さ湯」は、表わす物は同じであるが、ことばのニュアンス（意味の一部）が少し違っている。「さ湯」は「何も入れてない」ことを強調した湯である。

だから、「薬はさ湯で飲むこと」などと言う。「さ湯」は「白湯」とも書かれる。「白」は、白色のことではなく、「何もない」の意。「白焼き」「白粥」の「白」と比べていただきたい。

ニュアンスまで含めた意味がまったく同じ語はないと考えられるから、当然、補強形・補強語と元の語との間にも微妙な意味の違いが出てくる。